

20年度発掘調査遺跡の紹介

堂の前遺跡

(村上市下新保字高田2351-2ほか)

堂の前遺跡は、^{みおもてがわ}三面川左岸に広がる沖積地に立地し、標高は15.5mです。日本海沿岸東北自動車道の建設に伴って、平成20年4月から11月まで4,500㎡の発掘調査を行いました。

遺跡の時期は弥生時代中期末～後期で、検出した遺構は^{たてあな}竪穴住居1軒、溝4条、性格不明遺構6基、そのほか^{どこう}土坑・ピットなどです。遺構の分布は、調査区の東に弥生時代当時の河川があり、それに沿うように溝が巡り、竪穴住居・性格不明遺構・土坑などが位置します。

竪穴住居と考えているSI318は、溝が楕円形に巡ります。溝の規模は、上端幅が10～20cm、下端幅が5～10cmで、北東部分の溝は連続せず途切れます。南西部分は外側にもう1条の溝が確認できました。溝全体の規模は、長軸が5.5m、短軸が4.3mですが、その範囲内で中央やや北寄りに炉と考えられる焼土を検出しました。南東付近から^{はくへん}剥片や^{れき}礫、さらに焼土の上層からは土器片などが出土しました。柱穴は深さが20～30cm程のものが数基確認できました。残念ながら遺構の西側は、新しい河川によって竪穴の掘込部分が削られており、焼土の一部は土坑(SK327)によって破壊されています。県内の平野部において、当該期の住居は大変珍しい事例となります。

性格不明遺構については共通する特徴として、溝が楕円形や隅丸方形に巡ること、溝の範囲内に不規則ながらピットを検出できたことなど、竪穴住居と共通する点が少なからず認められることから、今後は住居の可能性を含めて再検討する必要があると考えています。

住居と考える性格不明遺構や、自然河川に沿うように検出した溝は、県内では事例がまだ知られていません。溝については、小ピットを伴うことから簡易的な柵と考えています。今後、整理作業を通じて、出土した遺物と遺構や遺跡の性格を結びつけ、より詳しく解明していきたいと考えます。

(株)シン技術コンサル 石川博行)



竪穴住居(SI318)



溝

やまぐち 山口遺跡

(阿賀野市山口字城ヶ窪3079ほか)

山口遺跡は、阿賀野川右岸の沖積地の自然堤防上に立地しています。現況は水田で、標高は約6mです。遺跡の東には旧小里川が流れ、東南には五頭山が見えます。一般国道49号阿賀野バイパス建設に伴い4月から11月まで延べ8,850㎡を対象に発掘調査を行い、弥生時代・古代・中世の遺構・遺物を確認しました。

古代・中世の調査では、現在までに掘立柱建物4棟、井戸15基、溝60条、土坑47基、炭窯1基のほか多数のピットを確認しました。これらの遺構の詳細な時期の検討は今後の課題ですが、多くは中世に属すると考えられます。

遺物は、中世(13~14世紀)のものでは、青磁、白磁、珠洲焼、土師質土器、刀子、釘、鉄滓などが出土しました。古代(9世紀後半)のものでは、土師器、須恵器の杯・蓋・甕などとともに石銚(巡方)の出土が目されます。石銚は腰帯に付けた石製の飾りで、県内では20数遺跡での出土しか知られていません。

弥生時代の調査では、現在までに掘立柱建物1棟、土坑15基、埋設土器1基を確認しました。これらの遺構は掘立柱建物を中心に、南側には土坑が列状に構築され、北西側の斜面部には捨て場が形成されるなど、当時の集落の様子が明らかとなりました。

遺物は、弥生土器、石鏃・石錐・磨製石斧・磨石・凹石・石核・剥片などの石器のほか、ヒスイや蛇紋岩に穴を開けて作られた垂玉が出土しています。特にヒスイは原石も出土しており、産地である糸魚川地域との交流を考える上で貴重な資料といえます。これらの遺物は、弥生時代でも前半(前期~中期前半)のものが中心です。

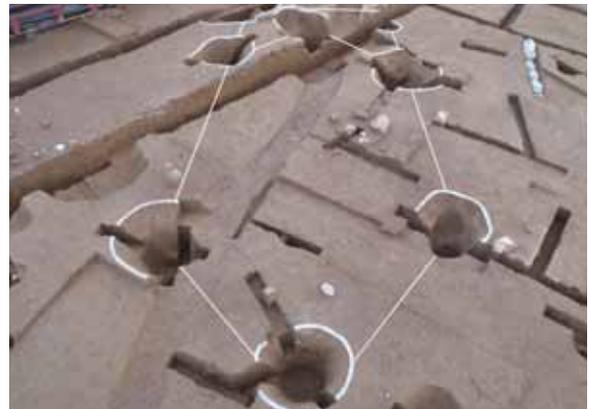
掘立柱建物は、柱を長六角形に配置して構築されており、棟持柱間は長軸約5.5m、短軸約3mです。

土坑の中には、直径1m前後、深さ概ね30~40cm前後の不整な円形となるものがあります。覆土中からは多量の土器片や石器が出土するのが特徴で、垂玉が出土したのものもあります。細かな骨片も確認されていることから、墓の可能性を検討しています。

(株式会社ノガミ 荒谷伸郎)



近景(古代・中世の遺構 西から)



弥生時代の掘立柱建物



弥生時代の土坑 遺物出土状況



弥生時代の垂玉(向って左:ヒスイ 右:蛇紋岩)

なかだはら 中田原遺跡

(上越市大字中田原字中田原82-67ほか)

中田原遺跡は、高田平野西縁の丘陵裾部、青田川と儀明川の間^{すそぶ あおたがわ ぎみょうがわ}に立地しています。北陸新幹線建設に伴い、7月から9月まで830㎡の発掘調査を行いました。

検出された遺構は、縄文時代の陥穴^{おとしあな}、古墳時代頃と推定される貯木場的な遺構^{ちよぼくば}、奈良・平安時代の井戸・土坑^{どこう}・道状遺構・家畜足跡等です。陥穴はいわゆる「Tピット」と呼ばれるもので、北側5基と南側2基がそれぞれ等高線に直交して配置されていました。

代表的な遺物として、貯木場的な遺構からは加工または未加工の多量の木材が出土しています。奈良・平安時代に属する土坑からは、底部に「大歳」と墨書された須恵器等が出土しています。(株)ノガミ 岡本範之)



全景(東から)



墨書須恵器

ふる と ろ 古渡路遺跡

(村上市古渡路字海老屋敷・大場沢字アケほか)

古渡路遺跡は、日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、4月から発掘調査を実施しています。調査対象範囲は南北総延長約600m、幅約40mに及びますが、一部は21年度に調査を行う予定です。

遺跡は三面川と門前川^{みおもてがわ もんぜんがわ}に挟まれた沖積地上に立地しています。調査区の北側は標高約14.5m、南側は標高約12.5mで、この緩斜面を横切るように複数の旧河川が流れており、流れによって低地や自然堤防に由来する微高地が形成されています。遺跡は中世の集落で、地形の起伏を活かして高いところは居住域、低いところは水田などに利用されていました。それぞれの居住域には掘立柱建物^{ほったてばしら}2～3棟と井戸5～6基があり、北側には道が東西に走っていました。居住域は約100mおきに置かれており、現在のところ居住域は4か所あったと考えています。居住域内での建物配置や変遷、及び居住域同士の関係については、遺物の検討を踏まえながら、今後考えていきます。

出土遺物の総量は少ないですが、14世紀初め～15世紀中頃の珠洲焼^{すずやき}、船載磁器^{はくさいじき}、井戸側・曲物^{いどがわ まげもの}などの木製品、硯^{すずり}、砥石^{といし}等が出土しています。このほか、縄文から弥生時代にかけての土器や石器も出土しています。

(土橋由理子)



全景(北から)



居住域(西から)

みなみおし あげ 南押上遺跡

(糸魚川市南押上2丁目ほか)

南押上遺跡は、海川の氾濫によって形成された自然堤防上に立地します。遺跡の北方約300mには日本海が広がっており、遺構確認面の標高は約4.0～4.3mです。北陸新幹線計画に伴い、4月から11月まで4,000m²を発掘調査しました。今回の調査で、南押上遺跡は古墳時代前期中葉～後葉（今から約1,600～1,700年前）の玉作遺跡であることが判明しました。確認できた遺構は、竪穴建物3軒、三辺あるいは四辺に細い溝をもつ建物4軒以上、不整形の土坑約10基、溝約10条、掘立柱建物を構成すると考えられる多数の柱穴群などです。

このうち、1号竪穴建物（SI01）は南北約7.8m・東西約7.0mで、これまで調査された新潟県内の古墳時代前期における竪穴建物としては、最大級です。床面のほぼ中央付近には、三方を石で囲んだ石囲炉が造り付けられていました。このような形態の炉は、一般に縄文時代に多く認められるものですが、古墳時代前期のものとしては新潟県内で初めての発見となります。建物の規模や、特殊な構造の炉を有する点などから、1号竪穴建物は集落内における有力者の住まい、あるいは共同作業場などの可能性が考えられます。

また、調査区内からは、短辺約4～5m・長辺約5～6mで、幅・深さ共に20cm前後の浅い溝が掘られた建物が複数見つかっています。これらは地面を掘り穿める竪穴建物とは違い、平地式で壁立ちの建物の可能性が指摘されています。互いに近接する竪穴建物や、溝をもつ建物、掘立柱建物との時期の差や性格の違いなどを明らかにすることが、今後の検討課題といえます。

多量の土器片のほか、多数の勾玉や管玉・棗玉といった玉類の成品・未成品類、剥片・チップ（石屑）類、それに玉を製作するための工具類（砥石など）が出土しています。玉を製作する石材の種類も豊富で、糸魚川を代表するヒスイをはじめ、緑色凝灰岩、赤玉（鉄石英）、メノウ、チャート、蛇紋岩、滑石、水晶などがあります。

北陸周辺地域において、この時期の玉作遺跡の調査例はそれほど多くなく、遺構・遺物の両面において、本遺跡の調査例は今後の古墳時代玉作研究の中で重要な位置を占めるものと考えられます。（榎吉田建設 小池勝典）



1号竪穴建物(SI01) (北から)



SI01石囲炉(北から)



溝をもつ建物(南から)



玉類・原石類

しも わり 下割遺跡

(上越市大字米岡字中割ほか)

下割遺跡は、高田平野のほぼ中央部、飯田川左岸(西側)の標高12～13mの沖積低地に立地します。一般国道253号上越三和道路の建設に伴い、平成14年度から発掘調査を行っています。

遺跡は大きく3時期の遺物包含層(上層:古代・中世、中層:古墳時代前期、下層:縄文時代)からなり、今年度は4月から8月まで、古墳時代前期の層、約3,200㎡について発掘調査を実施しました。

調査範囲の地形及び土層を細かく観察すると、北東から南西方向に向かって緩やかに傾斜しており、遺構・遺物は主に東側の小高い場所で見つかりました。西側と南側には湿地のような環境が広がっていたと推測されます。

遺構は、ほぼ東西方向に伸びる大溝1条、掘立柱建物1棟、多数の土坑・ピットなどがあります。そのほか、特筆されるのは途切れながらも方(円)形に巡る溝です。溝の周辺で土器がまとまって出土する傾向が見られることから、溝に囲まれた範囲が建物跡である可能性があります。

また、数メートルの範囲に甕や器台などの土器が集積もしくは廃棄されたようにまとまって出土した所が10か所以上確認されました。そこらから出土した土器のうち、日常の煮炊きに用いる甕については、県内に広く見られる在地の甕ではなく、近畿地方の影響を受けたものが半数近くを占めており、近隣の同時期の遺跡と比較しても特異なあり方を示しています。

今後、出土品の整理作業・分析を進め、他地域との交流の状況や遺跡の性格・意義について明らかにしていきます。(尾崎高宏)



全景(上空から:画面上が北)



大溝(東から)



方(円)形に巡る溝(建物跡?)



土器出土状況(近畿系譜の甕)

整理報告遺跡

うばが いりみなみ うばが いりせいてつ
姥ヶ入南遺跡・姥ヶ入製鉄遺跡

(長岡市島崎字姥ヶ入ほか)

2つの遺跡は、島崎川の左岸、西山丘陵から沢にかけて立地しており、互いに隣接しています(写真1)。一般国道116号和島バイパス建設に先立ち、平成8・9・11年に発掘調査を行いました。

姥ヶ入南遺跡 丘陵尾根上のわずかな平坦地に周溝を伴う墳墓を1基検出しました(写真2)。標高は35m、規模は長さ約6.6m×幅約6.3mで、隅丸長方形がやや崩れたような形をしています。墳墓の盛土は失われており、築かれた頃の姿を留めていませんでしたが、遺体を埋葬した場所(主体部)からは鉄剣と鉄斧、弥生土器の破片が出土しました。鉄剣と鉄斧はいずれも大型で、類例の少ない貴重なものです。墳墓の西側では、尾根を断ち切るような形で、幅約2.2m、深さ約1mの断面V字状の溝を確認しました。溝を掘り込んだ土を両側に盛り固め、さらに深くなるように作られていました。おそらく墳墓と同じ時期に作られたものではないかと考えていますが、検討の余地があります。また、さらに標高の高いところでは、炭や焼けた土が多く入った土坑を19基確認しました。

姥ヶ入製鉄遺跡 丘陵裾部では、地下式の炭窯が1期見つかりました(写真3)。炭窯とは、鉄作りのための燃料となる炭を作った窯です。長さ約6.6m×幅約1.4mで長方形を呈し、煙出しの穴が4か所あります。操業時期は古代と推測されますが、現在科学分析を行って調べているところです。そのほかに、炭や焼けた土が多く入った土坑が2基あります。ここでは製鉄遺跡の本体となる製鉄炉は確認されませんでした。遺跡から約350mのところにある立野大谷製鉄遺跡からは製鉄炉が見つかりました。

沢の中では、沢筋に沿うように自然河川跡が確認され、中から縄文時代後期から晩期の土器が多く出土しました(写真4)。この河川は縄文時代後期から平安時代まで流れていたようです。また、浅瀬のようになっている場所からは、縄文時代の木組遺構が見つかりました。トチなどの水さらし場かもしれません。河川の左岸は比較的平坦になっており土坑やピットが見つかりましたが、遺構など生活の痕跡は少ないことから集落の周縁部もしくは少し離れたところのようです。本遺跡周辺には製鉄遺跡を含め多くの遺跡が存在しており、関連も検討していきたいと考えています。(坂上有紀)



写真1 全景



写真2 周溝をもつ墳墓(姥ヶ入南遺跡)



写真3 炭窯内部(姥ヶ入製鉄遺跡)



写真4 河川跡の土器(姥ヶ入製鉄遺跡)

埋文インフォメーション

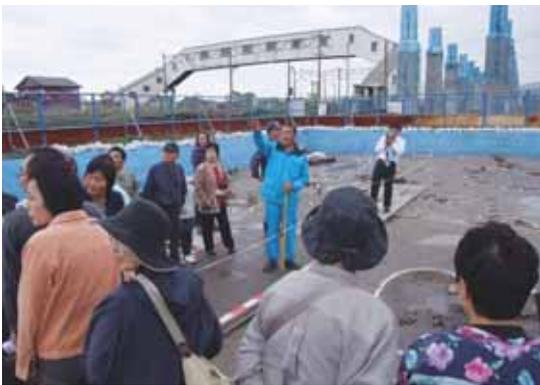
現地説明会・報告会・出土品展へのご参加ありがとうございました

発掘調査の成果をご覧いただくために、各遺跡で現地説明会を開催してきました。5月17日(土)の長割遺跡から11月15日(土)の古渡路遺跡・岩ノ原遺跡まで延べ17遺跡で実施しました。

7月20日(日)には、村上市ふれあいホールにて第15回遺跡発掘調査報告会を開催いたしました。調査担当者による発掘調査報告と村上市の発掘調査についての講演、及び展示解説を行いました。

平成20年度出土品展「出土品が語る新潟の歴史」は、新潟市豊栄博物館を会場にして、9月27日(土)～10月26日(日)に開催し、10月4日(土)には発掘調査報告・展示解説も行いました。

いずれも多くの方々からご来場いただき、誠にありがとうございました。当日、会場にて配布いたしました資料は、ホームページでもご覧になれます。



現地説明会(姫御前・竹花遺跡)



出土品展「出土品が語る新潟の歴史」

校外学習(センター見学・体験学習)について

校外学習や職場体験などで新潟県埋蔵文化財センターに来館した学校は、4月から11月末までに小学校45校(約3,300名)、中学校7校(約90名)を数えました。小学校では展示品の見学・石器使用体験・火おこし体験・煮炊き体験を組み合わせた活動を、中学校ではキャリア教育の一環として職場見学や職場体験を行う学校がほとんどでした。どの活動でも、生き生きと目を輝かせて取り組む子供たちの姿が印象に残りました。

例年、4月中旬から6月中旬、9・10月に来館する学校が集中しています。校外学習の日時を年度当初に決定している学校もあるようですが、申し込まれた時期や当事業団の業務の関係からご希望の日時にお受けできないこともありました。9・10月の実施を希望する場合は、7月中に申し込んで夏休み中に事前打合せをしておくと、夏休み後の準備を円滑に進められるかと思えます。来年度の計画を立てる際に参考にしてください。



火おこし体験



石器使用体験

県内の遺跡・遺物63

おおばさわ
大葉沢城跡(平成8年県指定)
 (村上市大場沢字寺山)

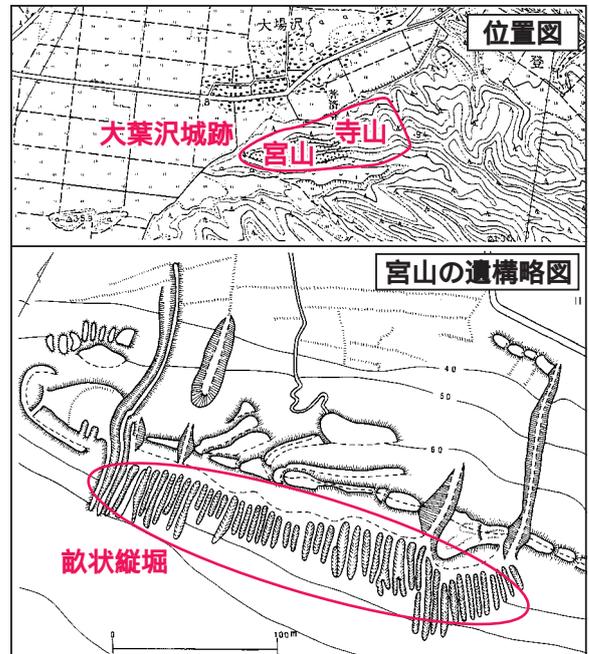
大葉沢城は、長津川と山田川に挟まれ、大場沢集落の南約70～80mの丘陵の先端部に位置しています。東西約700m、南北約200mの丘陵は、大小の曲輪、切崖、畝状縦堀、空堀、土塁などを備えています。畝状縦堀は、高さ3m・長さ15mほどの畝を、南面に6m間隔で50数条も設置した造りになっています。このような装備を施すことで防御を固めた城は、戦国時代の典型といえるでしょう。宮山・寺山の2つの山が連なる丘陵を利用したこの城域には、その名のとおり宮山には雷神社が、寺山には普濟寺があります。構造や機能の上では、宮山の方が中枢的な役割を担っていました。麓から雷神社かけて階段状に平地が並ぶような地形になっていますが、上段には城主の居館があり、下段は根小屋(城下集落)があったようです。

大葉沢城は、鮎川氏の居城と伝えられています。この鮎川氏は小泉庄(現村上市内)の国人で、本庄氏の一族と考えられてきましたが、そのことを裏付ける史料は見つかっていません。「鮎川氏系図」によると、鎌倉幕府草創期の有力御家人三浦氏の流れをくんでおり、やがて蘆名氏・鮎川氏等に分家していったようです。小泉庄での存在が確認できるのは上杉氏に従った鮎川藤長が最初で、時期は文明年間(1469～87)です。

その後、永正9(1512)年に鮎川式部大輔が越後守護代長尾為景に背いて大葉沢城に籠城し、天文8(1539)年には鮎川清長が小河長資とともに本庄房長の留守中に反乱を起こしています。本庄房長が帰国途中に死亡し、本庄城(村上天)は小河長資に乗り取られます。さらに永禄11(1568)年、日ごろから上杉氏により感情を抱いていなかった本庄繁長は、武田信玄と謀って挙兵します。このとき大葉沢城主だった鮎川盛長は上杉謙信に奉公していましたが、本庄氏に大葉沢城が奪われた知らせを受けて戦いに向かいます。翌年4月には伊達氏・蘆名氏の仲介によってこの戦いは終焉を迎えますが、その後の謙信の家臣団支配に何らかの影響を与えたといわれています。

慶長3(1598)年、上杉景勝が豊臣秀吉から会津への移封を命じられ、鮎川一族も主君とともに会津に移りました。

(写真提供：村上市教育委員会)



遺構略図(『新潟県中世城館等分布調査報告書』から)



大葉沢城跡(北から)

埋文にいがたNo 65

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
 〒956-0845 新潟市秋葉区金津 93番地1
 TEL (0250) 25-3981
 FAX (0250) 25-3986
 e-mail: niigata@maibun.net
 URL: http://www.maibun.net
 印刷 阿部印刷株式会社